

※「はらまち九条の会ホームページ」が開設。http://www.haramachi9jo.net
あるいは「はらまち九条の会」だけで開くことができ、この会報の全号も読めます。
「ホームページ」の担当ご希望の方、募集しています。事務局へお申出ください。

むしろ

蓮・席・蓮

九条はらまち

「はらまち九条の会」会報 No. 150

2010(平成22)年10月 1日(金)発行

<1949(昭和24)年の今日、中華人民共和国の成立(国慶節)。建国61年で勢いづく中国!>

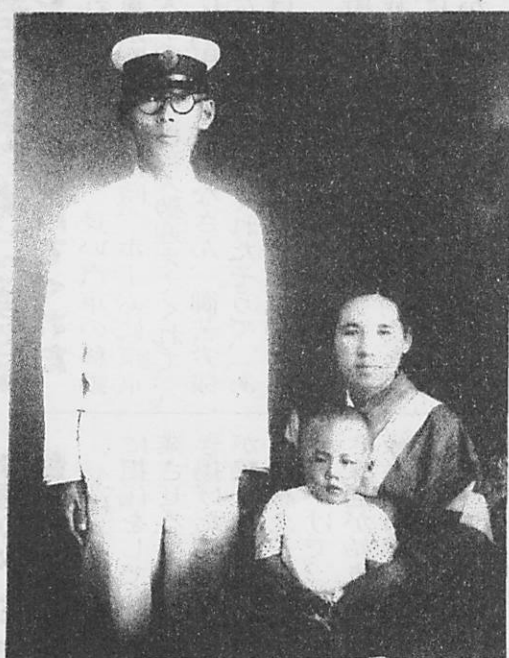
<46年前の1964(昭和39)年の今日、東海道新幹線の開通>



▲東京駅を発車する新幹線

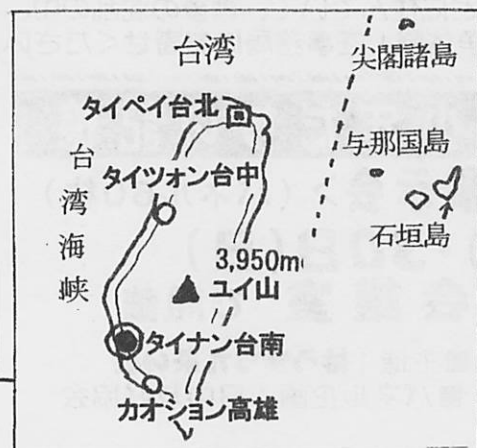
■東京オリンピックの開会までに開通させようと、急ピッチで進められた東海道新幹線建設は、開会式の10日前に開通式を迎えることができた。■プラスバンドが「汽笛一声」のメロディを演奏する中、午前6時、ひかり1号は東京駅のこれまでとは全く違う広軌レールの上をすべり出した。■当時の特急の東京～大阪間6時間半を4時間(のち3時間10分)に縮めたのは画期的だった。■明治初めに日本が招いたイギリス人技師が、植民地のインドと同じ幅に決めてしまっ

てしまっ以来の狭い軌道から解放されたことの意義も大きい。
(岩波ジュニア新書『カレンダー日本史』より)



▲昭和18年7月10日、父秀雄さんに召集令状が下り記念撮影。秀雄さん30歳、母秀子さん29歳、勝彦さん3歳(満1歳半)。

台湾は日清戦争後日本領になる。島の中央のユイ山(旧名・新高山)は3,950mあり、戦前の日本領では最高の山。真珠湾攻撃の暗号電文「ニイタカヤマノボレ」で知られる。



戦争に勝つ「勝彦」に命名
これは全くの偶然であるが、父の名は「秀雄」で、母の名前は「秀子」だったので、私は「秀一」と名付けられる筈だった。ところが十二月八日に対米英戦争が始まるや、当時の戦意高揚の風潮に煽られて戦争に勝つようと、急遽「勝彦」と変えられた。だから敗戦後

昭和十六年十二月二十四日、雪の全く無いクリスマス・イヴの日に、私は台湾の台南市で生まれた。両親共に小学校の教員で、父は現地の子弟、母は日本人の子弟を教えていた。

断片的に覚えていることは、それはさておき台湾の時代を覚えているかというと、断片的な事しか思い出せない。それでも台南市内が爆撃されて、夜更けに赤に燃えている炎と、防空壕の階段を降りた時、生卵が怪我をした人の血溜まり、足の裏にヌルッとした嫌な感触を覚えている。(後年、母の話では、私をおぶって防空壕へ向かった時、所々にころがって

原町に帰ってからは周りからよく「負彦、負彦」とからかわれたものだ。とにかく私は誕生の時から戦争の影響を受けたのである。



台湾・引き揚げ 記憶のかけら
南相馬市原町区西町 青田勝彦

いる死体を飛び越えて走ったのである。又、父が召集されて留守で郊外に疎開した時、荷車の様な物に乗せられて、途中どこか大きな木の下で母と夜を過ごした事も覚えている。戦争中内地では砂糖等は手に入らなかった様だが、さすがに台湾は砂糖の国で、我が家にも大きな瓶かめにいっぱい砂糖が配給されていた。ある時、近所に兵舎があったのか兵隊さんが二人来て、おはぎでも作るのか、砂糖を少しいただきたいと言って何とバケツを差し出して持って行った。へらも貸したのだが、返しに来た時、何人分のかあんこを練ったものか、へらがすり減って丸い部分が半分以下になっ

ていたことを、不思議に鮮明に覚えている。(裏面に続く)

(表のページより)

日本の敗戦、しかし報復もなく

二十年八月に敗戦となったが、九月には蒋介石の国民党軍が連合国の一員として日本軍の武装解除のため上陸し、十月からは台湾の実効支配に入った。戦時中日本は中国に侵略し、中国人民に多大の犠牲を強いていたので、台湾の日本人は報復されるのではと心配したそうだが、国民党軍は実に紳士的で安心したということです。

着の身着のままの引き揚げ 貨物船の暗い船底にムシロを敷いて

そういうわけで、何とか無事に引き揚げ船に乗船できたが、お金は制限され、財産も一人リュックサック一個と決められたそうで、まさに着の身着のままでの引き揚げであった。

内地まで何日かかったかは覚えていないが、オンボロ貨物船の暗い船底にムシロを敷いて、何百家族と一緒に過ごした事も覚えている。

二十一年三月二十一日に、広島県の大竹港に上陸したが、そこからの長い汽車の旅と、その汽車の窓ガラス等が無くなっている、開けっ放しの状態だった事を覚えている。

学生たちが東京駅で「苦勞様でした」と声をかけてくれた

これは父の話だが、長い汽車の移動後、東京駅に着いた時、ホームに東京の各大学の学生達が大勢迎えてくれて、口々に「引揚者のみなさん、御苦勞様でした」と声をかけてくれたそうで、「あの時は涙が出る程嬉しく、勇気づけられた」と、後年聞かされた事がある。

原町に着いた後は、戦後の物不足の中、我が家族もみんなが味わったと同じ様に生き抜き、私も青澁をたらし腹をすかせながらなんとか成長して来たわけです。

もしも満州にでも行っていたら...

今思うに、あの時両親が台湾でなく満州にでも行っていたら、我が家の歴史も大きく変わっていたかも知れない。日本に帰る途中で殺されたり、家族がバラバラになったり、私自身ももしかすると残留孤児になっていたかも知れない。そう思うと、父も召集されたが台湾守備隊で南方には送られる事もなく生き延びたし、揃って無事に故郷の原町に帰れた事自体がとても幸運だったと思う。

兵隊の敬礼をまねたり、日の丸の旗をふったり、立派な日本男児!

台湾の教え子達と父との交流 台湾での同級会に招待される

父は召集されたため、昭和十八年に担任をしていた現地人の子供達を卒業させる事が出来ずに別れたままで引き揚げた。その後はお互いに全く消息が絶えたままだったが、父の友人が台湾の教え子に招待されて行ったことがきっかけで、父と教え子との連絡がつき文通が始まり、そして父のもとに同級会の招待状が届いた。

昭和五十五年十月末に両親が招待されて行ったが、滞在中は正式な同級会や日帰りの修学旅行の他、連日朝から夜まで何人かが顔を出して付きつきりで案内してくれたりの歓待を受けた。

(この前後の事は『福島民友』さんが二回記事にしてくれた)

これをきっかけに交流が始まり、父母は二回台湾へ行き、台湾からは教え子達が団体で原町を訪ねたり、何人かは個人的に我が家を訪れてくれて、交流が深まった。私も現職の教員だったのでその様子を見て、教師と教え子の姿に羨ましさを感じたものだった。

子供達を絶対戦争の犠牲にはしない

戦後六十五年、世界のどこかで戦争が続き、何百万の人々が死んでいるが、人類の英知で紛争を解決する道を選んで欲しいし、子供達が犠牲になる様な状況は絶対に作ってはならないと思う。子供達の記憶に戦争にまつわるものを植えてはならないと思う。

(「はらまち九条の会」会員)

○この青田さんのように、戦時中は台湾や満州、中国、樺太などに住んでいて、戦後の混乱の中、苦勞されて日本に引き揚げた方も多いようです。「戦争体験」を事務局にお寄せください。

「漫画展 中国からの引き揚げ～少年たちの記憶」

<著名な漫画家による「戦争体験の絵」展示会> (パネル60枚)

来年1月28日(金)・29日(土)・30日(日)

原/町駅前 原町中央図書館・大会議室 で開催

■日本の一流の漫画家による引き揚げ体験の漫画展
赤塚不二夫・ちばてつや・森田拳次・北見けんいちなど。

■主催：はらまち九条の会
■パネル企画：日中友好協会